

海原の中にて

何を思う

一月二十日。やや静かな海の上を、一万トン級の大船、蓬来丸は、真一文字に西南に向つて進んでいる。まんまるい大海原、はてしも知らぬ大きな盪たらいの中に、たったこの船一雙、どんなに進んでも大円のまん中、線香の煙ほどにも見えない遠い水平線上の汽船の煙、それも消えてなくなる。おおいかかる大空の雲、晴れわたった海面の波又波。独り甲板びとに立つて何を思うのか。

同胞

独り大海原を凝視みつめしていると、本願、真如海、大宝海などの言ことばが思い出されて、そぞろお念仏せざるを得ない。如来の大慈悲を海にたとえられたことが、しみじみと味わわれて来る。まことに如来円融の徳にも似たる大海原であり、底知れぬ智慧海にも似たる大海ではある。この海にいったいいかほどのものが生かされているのであろう。しかし海は如来心に喩えられただけではない。生死海とも言われた。まこと、海は荒れ狂うている、生死の世界のはてなき相にも似ている。しかし如来の本願を弘誓の船と喩えられた意をも知らしていただけ。大船はただ一直線に進んでいる。

私は、後より見送つてくれる同胞のことが思われてくくならない。私は今日まで誰を力に、誰を相手に生きて来たのか、それはただ因縁のある同胞ではなかったか、如来真実の力の動きも、真実なるお念仏の光も、尊さも、それはただ同胞の上のみ拝いんで来た私であったのだ。

船の内に、長崎無電を通して、数本の電報が次ぎくく届けられる。

「オンニゴタイセツニ タニモト」

岡山の谷本さんからである。一昨夜、徳山では、共和の刀禰やなぎさんから、

「ツツシミニテ オミヲクリマウス フウドノコトナルチオタイセツニ チュウシン
ネンジタテマツル オハヤクオカエリマツ トネ」

と御親切な長電を頂いた。大阪から、河内の中務君からその他から。

ああ、我が背後には、念仏の本部員、念仏の同胞が、念仏と共に見送つて下さつてある。

我に如来まします

鹿島市寺町の徳永さんは、出発の前日、我が書齋に訪れ、一体の仏像を下さつた。台湾にお供をしてくれとの御好意である。仏像は京都からとりよせ、自分で箔をおかれたものである。仏像の高さ一寸五分、お室の高さ三寸五分のお木像である。何と言う御親切であろうか。船室の鏡の台にはこの仏像が安置されてある。仏像に対して念仏し、徳永様を憶う。

台湾とてさまで遠い所ではない。しかし内地ばかりにいる井戸の蛙には相当に遠い所である。内地を遠ざかりゆくにつれて、いよいよ念仏の同胞を憶う。身の上を気づかつて下さる方々のみ心、生きても死んでも何の損得もないこの凡俗の身を、私自

身よりもつと心配して下さる方が、たとえ一人でもあることは、もつたないことである。ただ細々と念仏している身、如来ましませばこそである。

我はますく、私にもつとも近きわずかな人と共に、如来本願に生かされて、地上を去つてゆくことを無上の喜びとし、願いとす。念仏の同胞は肉身以上の肉身である。

前によぶ声

二十一日朝、ボーイは電報を渡してくれる。

「ゴアンチャクフガンペキニマツ サクヒヨリアメフリダシ ホンジツモアメモヨウ オホシマツジウチホンダ」

今、同胞の招喚の声を具体的に受け取つたのである。大島のお二人と本田の奥さんと三人より外には知らないのである。ツジウチさん、ホンダさんはまだ見ぬ同胞である。

後に念仏して送つて下さる同胞があると共に、前にも合掌して迎えて下さる同胞がある。念仏の声と声とに挟まれて、大海原の中に、静かに念仏する。

まだ見ぬ世界の、まだ見ぬ同胞、どんな同胞に会うのであろうか。如来は、今また新らしい念仏の同胞を恵んで下さるのである。

念仏の世界が開けて来てより己来、如来は我に様々なもの見方を教えたもうたが、その中にも、会う人、見る人との因縁の深さについて考えねばならなくなつたこともその一つである。「袖の振り合い多生の縁」という。まして同一念仏の世界において会う人は、まことに宿世久遠劫の因縁によるのである。一人として仏子ならざるはなく、宿善開發して大法さえ耳に入れば、仏の子とならぬ人もない。であるが故に、私においてはすべての人の存在は絶対である。目に一文字を知らぬ老婆なるが故に、これを軽んじ、地位ある人なるが故に、それが為に目がくらむが如きことは許されないことである。一切の人は、誰も皆、絶対の存在である。それをそうと思わぬ我が心こそ、くせ者である。

ああ、今、我は前に念仏の人によつて呼ばれている。そもく、いかなる人に会わせたもうのであるか。

大島みち法姉が台湾に渡られたのは、昭和八年十二月、十五周年の記念講演会の直後であつた。それから後、四ケ年間、大島みち法姉は台湾において東奔西走の活動を続けられたのであつた。そしてそれが、今、我等をして渡台せしめるのである。法姉の念仏生活の尊いかな。

雨か風か

私の心はおどる。

曇る行く手、数時間後には、待つてくれている同胞に会うのである。

しかし私の心はさゝやく。「多くを期待してはならない。多くを求めてはならない。たつた一人の友が出来ればいい。」そうだ、それが私のここ数年間の歩みであつた。

けれども縁のつながら念仏の子を拝んで来よう。念仏の人の尊さを、私の無明の深さを拝んで来よう。導かれて求めて聞かして頂いて来よう。

「汝、外に平安を求めてはならない。」心の底の声が聞える。過古十九年、私の行手にはいつも平安は待つてはいなかった。定めしここにもまた、雨か嵐か、何が待つているのかわかったものではない。みんな皆、私の業の相である。合掌して、念仏の中に受けさせて頂かう。

私の心は平安である。内地の同胞よ。海はあまりしけもせず、船は今、間もなく島に着かんとす。船はいつしか雨の中に入った。正覚寺と、私の心は静かである。念仏の心はいと静かである。